

**赤ずきん**

バーナーディット・ワッツ／絵 生野幸吉／訳  
岩波書店（1978.7）

図書館でよく尋ねられる昔話に、グリム童話の赤ずきんがあります。数ある絵本の中から、「赤ずきんならこれ」という作品を紹介します。



おばあさんからもらった赤いずきんの似合う女の子は、みんなから「赤ずきん」と呼ばれていた。

ある日、森の中にあるおばあさんの家へ行くことになった赤ずきんは、現れたおおかみに、こんなに花がきれいなのに、小鳥が歌うのに寄り道しないの？と道草をすすめられる…

おなじみのお話ながら、原作に近いとされる訳の文章はリズムよく流れるようで、ストーリーテリングでも用いられます。絵は直線的な描写と色彩豊かな情景で物語を盛り上げています。

さまざまな説のある赤ずきんをしっかりと描いているこの作品から、読み継がれていく絵本の強さを感じます。

**おだんごぼん** ロシア民話

せたていじ／訳 わきたかず／絵  
福音館書店（1966.6）

おばあさんが、粉箱をごしごしかいて集めた小麦粉で作ったおだんごぼん。窓辺で冷やしているうちに、ころころと逃げ出してしまいます。うさぎやおおかみ、くまに食べられそうになるたびに、歌を歌って逃げるのですが、ずる賢いきつねにだまされて…



有名なロシア民話。いろいろなタイトルで絵本化されていますが、中でもこの本は日本を代表する画家が描きだすおおらかな絵が魅力です。やわらかな色彩で、表情豊かに描かれるおだんごぼんは、お話の中で繰り返し歌われる「ぼくは てんかのおだんごぼん…」という楽しい歌のリズムとともに、40年以上もの間、子どもたちに親しまれてきました。

地味な絵本ながら、子どもたちを魅了してやまない1冊です。

**ガラスのめだまときんのつなのヤギ**

田中かな子／訳 スズキコージ／画  
福音館書店（1988.5）

まず目を引くのはカラージュを使った挿絵でしょう。題字に使われている麻ひもも、民話を持つ土のにおいを感じさせてくれます。



物語は、おばあさんが大事に育てた麦を憎らしいヤギが畑に居座って次々と食い散らかし、困り果てたおばあさんが他の動物たちに助けを求めようというものです。

ふてぶてしいヤギの振る舞いに悔し涙を流すおばあさんと心優しい動物たちとの出会い。個性豊かな面々と繰り返しの言葉、してやっつりの最後まで、一喜一憂しながら楽しめる絵本です。

とりわけ、ヤギがやっつけられる場面は、思わず「やったあ！」という声が聞こえそうです。

**3びきのくま** ロシア民話

トルストイ／文 バスネツォフ／絵  
おがさわらとよき／訳  
福音館書店（1962.5）

繰り返しのおもしろさでよく知られている昔話です。

森の中、一人迷い込んでしまった女の子は、帰り道を探しているうちに、家を見つけました。ちょうど戸も開いていて、誰もいないので中に入ってみました。そこが3びきのくまの家とは知らず、女の子は好奇心いっぱいスープを飲んだり、いすに座ったりいろいろ試してみます。そこへ3びきのくまが帰ってきて…

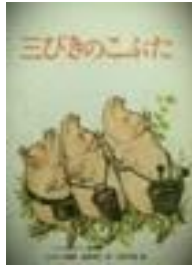


落ち着いた色彩、ていねいな筆づかいで描かれた小物や部屋の様子など、ロシアの民族的な特徴や、独特の雰囲気をももたし、物語に深みを与えています。おおきい、ちゅうぐらい、ちいさいの言葉と、場面展開が繰り返されることで読者の期待感が高まります。

女の子に気持ちを重ね、ドキドキしながら読める作品でしょう。

**三びきのこぶた** イギリス昔話  
 瀬田貞二／訳 山田三郎／画  
 福音館書店（1967.4）

「三びきのこぶた」の絵本は他にもたくさん出版されていますが、この本は、元になるイギリスの昔話を忠実に絵本化したものです。他の絵本では省略されていることの多い、「れんがの家を吹き飛ばせなかったおおかみが、こぶたをかぶ畑やリンゴ畑に誘い出そうと計画する」というエピソードや、残酷な結末もきちんと描かれています。



大人にとっては衝撃的なその結末を、子どもたちが素直に受け入れて喜ぶのは、悪者をやっつけてハッピーエンドで終わるといって単純明快なストーリーが、子どもたちにとって、とても納得のいくものだからでしょう。

動物画の達人による美しく繊細な絵も魅力的な1冊。親子で昔話の世界を楽しんでみてください。

**ふしぎなしろねずみ** 韓国のむかしばなし  
 チャン・チョルムン／作 ユン・ミスク／絵  
 かみやにし／訳  
 岩波書店（2009.6）

「隠してあるものは、ねずみが守ってくれる」という言葉がある韓国で、「魂（たま）ねずみ」という題で語られてきた昔話。



ある雨の日、昼寝をしているおじいさんの鼻の穴を、しろねずみが出たり入ったりしているのを見つけたおばあさん。外へ出て行ったしろねずみのあとを追ひ、道を通りやすいように手助けしてやりました。やがて目を覚ましたおじいさんが夢の中で見ていたのは、しろねずみの行動の一部始終でした…。

ユニークな展開と個性豊かな絵が印象的。前半の濃い青を基調にした雨の場面から、明るい黄色に彩られた後半場面への変化は鮮やかで美しく、心おどるおじいさんとおばあさんの気持ちを表すようです。

素朴で優しい二人が、しろねずみの導きによってお金持ちになる結末に子どもも大人も大満足です。

**マーシャとくま** ロシア民話  
 E・ラチョフ／絵 M・プラトフ／再話  
 うちだりさこ／訳  
 福音館書店（1963.5）

ある日、マーシャは村の女の子たちと一緒に、森へキノコやイチゴを取りにいけますが、いつのまにか森の奥深く迷い込んでしまいます。1軒の小屋を見つけたマーシャは中に入りますが、なんとそれはクマの住み家で、散歩から帰ってきたクマに捕らえられてしまいます。逃げようとするマーシャと逃すまい



とするクマの知恵比べ。気になる結末は絵本を読んでものお楽しみに。

マーシャに身の回りの事をさせて、逃げ出したら食べてやるぞと脅すクマ。ところが、マーシャに頼み事をされると断れずに言いつけを守ろうとするとところがユーモラスで、憎めません。

やさしい語り口と深みのある色づかいによる挿絵によって、ロシア民話の世界がわずか12ページの絵本の中にもいきいきとよみがえります。

《編集委員のつぶやき》 図書館ではおはなし

会をしていると、赤ちゃんから6歳ぐらまでの子どもと一緒に参加することがあります。そんなとき、赤ちゃん絵本では物足りないかなと迷いつつ読むと、大きな子でも予想外に楽しんでくれて、意外に思ったこともあります。

絵本は幼い子どもが自分で読むのではなく、大人が読んであげるものです。子どもにとって、大好きな身近な大人と一緒に読んでくれることがうれしいのです。絵本を通してふれあうひとときを持ってください。

この冊子では、年齢別、テーマ別に絵本を分けていますが、あくまでも目安ですので、参考程度にしてください。